

日本語教育に役立つ多義記述のための一考察

—テクルを例に—

お茶の水女子大学 院生 曹ナレ

日常会話でよく使われる語彙はたいてい多義語であり、外国語として日本語を学ぶ学習者がその多くの意味を理解・習得するのは困難である。特定語彙の意味を授業の中で包括的に扱うことはほぼないため、学習者はその場限りの語彙の意味を断片的に覚えて行くことになる。ましてや補助動詞や複合動詞といった活用した形の語彙は、その形式的側面にだけ注意が向けられ、その表現が持つ多様な意味については注目されないことが多い。学習者には捉えにくい多義語の意味の理解を助けるためには、各意味間のつながりを提示する方法が有効であると考えられる。そこで、本研究では、補助動詞テクルを対象項目とし、その表現独自の意味を厳密に記述し、多義語の意味を学習者に効果的に提示する方法について考察を行う。多義の妥当な記述のためには認知意味論の知見を援用することとする。

動詞「来る」は、人が話し手の方に移動する事象を基本的意味とし、移動主体、出発点、到着点、経路、移動方向などの意味要素で構成される。この各意味要素の拡張により多義構造が生まれる。補助動詞のテクルも同じ意味要素を持ち、テを伴って先行動詞に移動の方向性や時間の経過の意味を付与する働きを持つ。テクルは空間的な方向性を表す意味から継続、変化、開始などアスペクトを表す意味へと展開するが、特にアスペクトを表す意味の理解・使用に学習者の困難が予想される。従来、文法項目として扱われてきたアスペクト形式を意味拡張の過程の中で説明することで、学習者の理解を高めることはできないだろうか。また、そのためにはどのような記述の仕方が有効であるか。本研究は、学習者の多義語の理解を深め、的確に運用できるようにするための日本語教育を目指し、多義語の意味記述や提示の仕方について考察するものである。